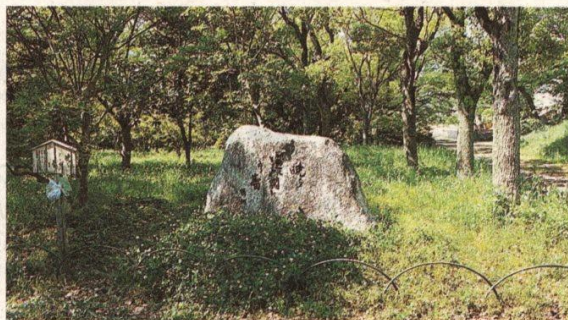


大阪城公園にひっそりと立つ
鶴彬の句碑 大阪府中央区



反骨 の記録

34

17文字に込めた危機感

反戦川柳



人知れず句碑は立つ。大阪城公園の緑地の片隅。川柳作家・鶴彬は、ここにあった陸軍大阪衛戍監獄にとらわれていた。自由な世へ願いを込めたのか。暁をいだいて闇にゐる。鶴彬資料室によると、29年間の生涯で1千句余りの川柳を残した。15歳で地元紙に投稿し始めたころは叙情的な作品が多い。

幼くして母親と別れ、父親も失った自らの境遇が影響したらしい。人生のはかなさを表現したような句もある。

燐寸の棒の燃焼にも似た生命養子に入ったおじの織物工場が昭和初期の恐慌にのみ込まれ倒産。仕事を求めて出た大阪で社会の底辺を見る。その後、上京しプロレタリア川柳を宣言した。かほく市の顕彰する会世話人、遠田勝良さん(76)は言う。

「芸術至上主義でなく、現実に向き合う川柳でないとダメだとして、貧しい労働者や農民に寄り添いました」

食堂があっても食へぬ失業者
1930(昭和5)年、金沢

市の陸軍歩兵第7連隊に入隊。すぐに軍律違反で重営倉入りの懲罰を受け、31年には共産党系機関紙を配ったとして懲役2年の刑に。その時、送られたのが大阪衛戍監獄だった。

真冬に水風呂に入れられるなどの拷問を受けた。33年、刑期を終え除隊となった。川柳を再開したが、朝鮮人など弱者へのまなざしは変わらなかった。母国掠め盗った国の歴史を復習する大声

みな肺で死ぬる女工の募集札
鶴彬の服役中、日本は中国侵略の足場づくりを進めた。出獄2年後、再び上京。作品にも「戦争」が映し出され始める。時代への抵抗や疑問が17文字に込められるようになっていく。

ざん壕で読む妹を売る手紙
移き手を殺してならぬ千人針

遠田さんは思う。「いとし人も、貧しい人も、戦争に引きずり込まれてしまうという危機感があったのでしょうか。非人間的なものへの憤りを感じます」中国との全面戦争が始まった37年の暮れ、治安維持法違反で再び逮捕される。そのころ柳壇には戦争を美化する句があふれていた。鶴彬が発表した最後の6句が反国家的だ、と川柳人が特高に密告したとの説もある。

手と足をもいだ丸太にしてかへし
万歳とあげて行った手を大陸において来た
胎内の動き知るころ骨がつき
東京都内の留置場から病院に送られ、翌年9月、ベッドに縄で縛られ赤痢で死亡した。「闇にゐる雷」が開く世を見ることはなかった。

(中村尚徳)